【77】 樹を伐って水を張り暑さを凌ぐ？

2013年に東京駅のレンガ建ての駅舎が、約100年前の創建時（1915年）の姿に復元され、引続いて進められた駅前広場の整備も2017年（平成29年）に完成しました。

地下工事や何やらで長年にわたり工事現場の観を呈していた広場が見ちがえるばかりにスッキリした姿になりました。

この駅前広場の整備に際しては、わが国を代表する都市計画、建築、景観の分野の人材が集まって検討し、いわば現在の日本が望み得る最良の計画に基づいたもののはずですが、現地を見て一都民としての私は大いに不満を覚えました。

昔の大正、昭和初期の駅前広場は、中央に公園の泰斗、本田静六が移植したイチョウの大樹を置き、周囲にプラタナスの街路樹が多数植えられており、又、皇族や外国大使等の賓客用の中央口の前には立派な松が何本もあり、広場全体が緑豊かな区域となっていました。

広場を囲むビル群も関東大震災後の復興で中央郵便局や震災以前からの丸ビルをはじめ、高さを100尺（30m）に揃え、東京駅の駅舎を圧迫することもなく、落ち着いた感じを演出していました。

私は、この昭和初期の東京駅前広場が歴史的に見ても一番美しかったと思います。

さて、一転して平成の広場はというと、イチョウの大木は失われ街路樹はマバラになり、広場の中央部は一部に芝生がありますが、何もない一面の石畳が広がった確かに“広場”になっています。

従来のがわが国では見られない景観で、欧米の市庁舎や寺院の前の広場を連想させます。

夏の暑い日本で日陰の無い石張りの広場というのは似つかわしくないと思うのですが、石畳の一部、30m四方くらいの正方形の部分が2カ所あってわずかに低くなっており、浅く水を張ったり、流したり出来る構造になっています。「水盤」というものだそうです。

計画立案者の一人、著名な建築家の内藤 廣の言でも、“・・・言うまでもなく、厚い御影石に覆われた広場は畜熱された熱と太陽からの光線で熱射地獄になるが、水盤があることでそれがかなり救われている。”（※）と言っているのですが、そこには緑を減じて石畳とし、その石畳に水を張って暑さを凌ぐという滑稽さに、この硯学が気付いていないとすれば、いささか滑稽です。

念のため先日（8月21日）、猛烈に暑い日に広場へ行って見ました。

水盤には水深5mmくらいの浅いというより薄い水流が静かに流れていてそれ自体は見事で、子供が喜んで靴のまま遊んでいましたが、だだっ広い石畳にたたずんで、これはやはり日本の文化では無いと思いました。

近年、アスファルト舗装の黒い表面が熱くなるからと、白っぽい銀色の"遮熱性舗装"というのが登場して少しずつ広がっていますが、これも一種の対症療法にすぎず本質的な技術ではありません。

考えてみれば、小河川、堀、運河等の水面を暗渠化したり埋め立てたりし、街路樹の緑を減らし、建物の建蔽率を増加させ、あまつさえ公園にも緑を減らして保育園や老人施設を造るといような行動も現在の炎熱地獄を招く一因となっているのです。

新築家屋に太陽光パネルの設置を義務付けるとか、石畳の水盤とか、遮熱性舗装とかという発想は、当事者の真剣な努力と裏腹に、どこか本質をはずれているという感じがしてならないのです。

(※) 東京駅・駅前広場のデザイン、篠原 修・内藤 廣 編著、彰国社 ****